

NEWS LETTER

from Iwami Art Museum

February 2017 vol.25



島根県芸術文化センター
SHIMANE ARTS CENTER
島根県立石見美術館
IWAMI ART MUSEUM

島根県立石見美術館ニューズレター

企画展「キャプテン・クック探検航海と『バンクス花譜集』展」

200余年の時を超えて—未知との遭遇から植物図譜刊行まで

企画展「没後70年 北野恒富展」

美人画ぎらいの美人画? 北野恒富の魅力

動画「赤瓦に暮らす」ついに完成

石見の歴史的景観・赤瓦

25



《クリアントゥス・フニケウス》『バンクス花譜集』より(ニュージーランド)
エングレーヴィング Bunkamura ザ・ミュージアム収蔵

©Alecto Historical Editions Ltd / The Trustees of the Natural History Museum, London

「キャプテン・クック探検航海と『バンクス花譜集』展」

2017年4月22日(土)～6月26日(月)

休館日:火曜日(ただし5月2日は開館) 開館時間:午前10時～午後6時30分(展示室への入場は閉館30分前まで)



A



B



C

A. 《バンクシア・セルラータ》(オーストラリア)

B. 《デプランケア・テトラヒュルラ》(オーストラリア)

C. 《クレロデンドラム・パニクラートゥム》(ジャワ)

いずれも『バンクス花譜集』より、エングレーヴィング、
Bunkamura ザ・ミュージアム収蔵

©Alecto Historical Editions Ltd / The Trustees of the Natural History Museum, London

200余年の時を超えて —未知との遭遇から植物図譜刊行まで

『バンクス花譜集』は、743点の銅版画からなる植物図譜である。1768年から約3年に渡るキャプテン・クックの第1回太平洋航海に同行したジョゼフ・バンクス(1743–1820)が旅先で実施した植物学的調査の成果の一端を示す内容で、総数3万点を超える収集資料から厳選された743点が、採取された地域ごとに紹介されている。ここではその成立背景についてわずかながら紹介したい。

1768年8月26日、キャプテン・クックことジェームズ・クック(1728–79)を艦長とするエンデヴァー号は、イギリスのプリマス港を出航。南米経由で太平洋へと進路をとった。この旅最大の目的が翌年6月にタヒチで金星の太陽面通過を観測することにあつたためである。好奇心旺盛な若きバンクスはこのとき25歳。当時の船旅は今ほど容易でなく、死者も多く出す危険と隣り合わせのものであつたが、新たな植物発見への意欲からこの航海への参加を熱望し、科学班の班長として乗船していた^{※1}。植物学者のダニエル・ソランダーや画家のシドニー・パーキンソンら調査隊を組織しての旅立ちであつた。

船は出航から7ヶ月半ののち、タヒチへ到着。金星観測の目的を果たし、続いてニュージーランドに到達。半年近い綿密な

調査ののちにニュー・ホランド(オーストラリア)東海岸へと航路を進めた。当時はいずれの地も西洋人にとっては未踏の地^{※2}だつた。クックは海岸の測量と海図作りに注力し、バンクスたちは植物の収集と記録に没頭して、大量の標本を採集した(表紙、図A, B)。彼らに特別な興奮と大きな成果をもたらしたニュー・ホランド東海岸初上陸の地点は、のちにクックにより「ボタニー・ベイ(植物学湾)」と名付けられ、その名は現在も同地に残る。好奇心旺盛な彼らはまた、アボリジニやマオリといったその土地の先住民の暮らしや文化にも強い関心を抱き、言語や民族資料も大量に記録、収集した。

ボタニー・ベイを出発後、グレート・バリア・リーフを北上していたエンデヴァー号は、珊瑚礁に乗り上げ船底を大きく損傷してしまふ。積み荷を大量に捨てて何とか沈没は免れたが、帰還のためには本格的な修理を要した。仮の修理が済むと東インド会社が拠点を置いていたジャワ島のバタヴィアへと航路を進め、修理のため同地に2ヶ月ほど滞在した。バタヴィアはヨーロッパとアジアの文物が出会う交易都市であつたが、当時は衛生環境が悪化しており、赤痢やマラリアが蔓延していた。滞在中に船員たちは次々に病に倒れ、7名が死亡。ジャワを出

て喜望峰へと船を進める間、更に31名が落命した。その中には画家のパーキンソンも含まれた。

1771年7月、エンデヴァー号はついにイギリスに帰港する。バンクスたちは約3年にも渡り遠く世界の果てまで旅し、驚きと発見に満ちた膨大な資料をもたらした勇者として絶賛された。彼らが収集した植物は3,600種、3万点を超え、そのうち1,400種は西洋の植物学者たちにとって全く新しいものだった。バンクスは早速に膨大な資料をとりまとめ、図版や記載内容の充実した豪華な植物図譜出版を目して動いたが、彼の生前それは実現しなかつた。ソランダーの死や自身の多忙、資金不足が原因と言われている。全体像が明らかとなるのは企画から200余年の時を超えた1980年代のことである。

※1 乗船に先立ちバンクスは1万ポンドの大金を寄付した。元々大地主の一人息子として生まれたバンクスは、21歳の時に亡き父から巨額の遺産を相続し、十分な資金力があつた。

※2 ニュージーランドは1642年にオランダの探検家が西海岸の一部を地図に記していたが上陸はされておらず、ニュー・ホランド東海岸は未踏の地だつたといわれている。



図1



図2



図3

図1. 北野恒富《むすめ》 大正14年(1925) 当館蔵

図2. 北野恒富《願いの糸》 大正3年(1914) 木下美術館蔵

図3. 北野恒富(原画) ポスター「サクラビール」 印刷博物館蔵

美人画ぎらいの美人画? 北野恒富の魅力

当館の美人画コレクションの中に、北野恒富の《むすめ》という作品がある(図1)。再興第12回院展に出品された堂々とした絵だが、「むすめ」にしては老けてない?」とか「あんまり可愛くない」といった気の毒なコメントが寄せられる。発表当時も同世代の日本画家、尾竹竹坡から「非常にませた娘である(中略)自分には娘とはうけとれない」※1と評された。振袖の色が地味なのと、顔の造作が「愛らしい娘」のイメージからちょっと外れているのが原因だろう。

しかし恒富は美少女が描けなかったわけではなく、例えば《願いの糸》(図2)では、七夕の星に願いをかけて針に糸を通す、優美な娘が描かれている。これなら多くの人に「美しい娘」とうなずいてもらえるだろう。

金沢に生まれた北野恒富(1880-1947)は、大阪に出て木版の彫り師となったが、やがて浮世絵師、月岡芳年の弟子である稲野年恒に入門し、新聞の挿絵画家となった。明治時代末からは呉服店や酒類のポスターに華やかな女性像を多数提供する一方、日本画家としても活躍した。明治43年(1910)の文展初入選以降、手がけた作品のほとんどが女性像であるため「美人画の作家」とされる恒富だが、どうも私はそう呼ぶことを躊躇してしまう。確かに愛らしい舞妓

や魅惑的な女性も描いているが、今回の回顧展の出品作にも「美人」を描こうという意識が感じられないものがいくつもある。同世代の籀木清方や上村松園といった美人画の名手と比べると、その「はずし」っぷりが際立つ。清方も松園も、もちろん「美しい女」を描けばよとしていたわけではなく、作品ごとに構想を練ったわけだが、容貌には各自の理想が現れている。具体的には面長で切れ長の目、すっきりとした鼻筋と小さな口、といった特徴があり、画面全体に品格や柔らかな風情が漂うものがほとんどである。ところが恒富の場合、顔の描き方には何パターンもあり、雰囲気も怖かったり、お色気過多だったり、上品だが冷たかったりと、ばらつきがある。

消費者を惹きつける役目を担うポスターには、恒富は大衆の好みに合う「美人」を写実的に描いた(図3)。媒体によってスタイルを変えられる器用さと戦略的思考を持ち合せていた恒富は、あえて「美人」らしく描かないこともあったと考えられる。

恒富は《むすめ》を描いた前年、こんなことを語っている。「目鼻立ちとか、姿とか、線とか色とかに注意を払った美人画よりも、そんな事は第二儀として、少々不縹緖ふびんごでも、線がピリピリ顫ふるへてゐてもよい、女を現した画としての調子が取れてゐて、作家の個性

が遺憾なく現はれ、生命が躍動してゐるものならば、それは推奨するに足る立派な作品であると云へる」※2。さらには顔かたちの整った「型に囚われた」美人画、そして「美人画」という呼称そのものも否定した。

それなのに他の主題はほとんど手がけず、女性をモチーフに選び続けた恒富は、一体何を表現したかったのだろうか? 女性の内面なのか、雰囲気なのか、あるいは純粹な色や形なのか……作品ごとに異なる表現が繰り出され、多様な解釈ができる恒富の作品からは、容易に導き出せそうにない。ただ、美人画が日本美術史における重要なジャンルであることは紛れもない事実であり、そのど真ん中を狙ったり、わざと踏み外したり、様々な試みをした不思議な画家の存在は、美人画という概念に横から光を当て、ぼんやり見ているとは分からない影を浮かび上がらせてくれるということはいえる。

最後に誤解のないよう言うておくが、私自身はどっしりと落ち着いた《むすめ》と、振れ幅が大きくて見飽きることがない画家、北野恒富をこよなく愛している。

※1 尾竹竹坡による院展評(『読売新聞』1925年9月15日)

※2 北野恒富「美人画」といふ呼称(『大毎美術』第16号、1914年1月発行)

動画「赤瓦に暮らす」ついに完成

石見の歴史的景観・赤瓦

「石見の国に入ると、めっきり赤瓦の家がふえる。山陰独特の、何かねちっこい、沈んだ強さを持った色だ。土の色も赤い。そして日本海の、濃く、冷たい、深々とした群青。ふしぎなハーモニーだ。」(岡本太郎「出雲」『芸術新潮 1957年7月号』)

前衛芸術家 岡本太郎が、「日本再発見 芸術風土記」の旅で訪れた時に書いた文章の一節です。

赤瓦、何かねちっこい、沈んだ強さ
濃く、冷たい、深々とした群青
ふしぎなハーモニー……

最初この岡本の文章を読んだ時に、「うまい! さすが!」と感心しました。岡本は石州瓦の赤色に「湿気」と「粘り」と「深さ」と「温度」を感じ、冷たく群青色に広がる日本海と対比させて、これがこの地方の風景を語る核心だと、瞬時にとらえたのでしょう。この直観力はやはりすごい。

岡本の言うとおり、赤瓦は石見の風景の原点なのです。

大田市、江津市、浜田市、益田市、そして Grantow としまね文化振興財団が組織した「石州瓦の旅」実行委員会(委員長: 澄川喜一 島根県芸術文化センター長)で、このほど動画「赤瓦に暮らす」を制作しました。28万枚の赤瓦で全身を包んだ Grantow として、石見の風景を代表する赤瓦に関心を持ってほしい、そして Grantow も含め

た「石州瓦を巡る旅」に世界中の人を誘いたい、と考えて企画したものです。

制作は昨年6月から行いました。石見銀山の鉱山町として栄えた大森でドイツパンの店を営む日高さん、石州瓦の故郷である都野津で赤瓦建築の保存活動をする梅田さん、日本海沿岸に広がる波子の町で街づくりを進める黒川さん、かつては日本海交易、江川水運、山陰道交通の要衝として栄えた江津本町で地域資源を活かした活動をする伊藤さん、浜田市長沢で伝統にこだわった瓦づくりを継承する亀谷さんなどにインタビューし、このインタビュー画像と、赤瓦や赤瓦の街並み、石州瓦で最大の出荷量を誇る(株)丸惣の瓦工場、日本海、そして Grantow の外観や中庭、ホール、美術館の映像などを組み合わせて構成しました。これを観ると瓦についてのイメージが少し変わる、そのような約16分の「石州瓦の旅」です。映像もとてもきれいで、英語版も作りましたので、地元の方にはもちろん、県外の方や海外の方にも観てほしいと思います。

石見地域に広く堆積した都野津層の粘土と、焼くと赤く発色する出雲来待石を砕いて作った釉薬と、1300度を超えるとても熱い炎がこの硬い石州瓦を作りました。紀年銘のある瓦から考えてもすでに200年以上作り続けられています。登り窯で焼いていた1960年代以前の瓦には、一枚一枚違う色ムラと表面のざらつきがあり、光があたりゃ屋根のぬくもりが増して、建物がそのま

ま一個の民芸品のように思えてきます。生活感を残しながら、質素で、素朴で、手で触らなくても手触りを感じる、工芸品というよりも民芸品に近い味です。

私が石見地域にかかわりを持つようになったのは30数年前からです。石見で暮らした7年間、そして出張でたびたび訪れるうちに、この独特の渋い色合いが自分の身体の中に浸みこんできたような気がします。動画は現在、YouTube にアップする作業をしている最中です。3月中旬には一般公開できると思いますので、これを読んでいただいている皆様もぜひ一度ご覧ください。「赤瓦」で検索するとドローンで撮影した Grantow の映像が目飛び込んでくるはずですよ。そしておそらくほとんどの方に知られていない、伝統的な建築資材である赤瓦の良さと、石見独特の赤瓦景観の魅力を感じてください。

国内外のたくさんの方に観てほしい。皆さまからも配信をよろしくお願いします。

※ご要望があればDVDを進呈します。
Grantow (0856-31-1860)まで。(先着10名限定)

(若槻真治 Grantow 副センター長)



登り窯時代の瓦運搬 石州瓦工業組合提供



昭和40年代の江津市都野津町 江津市提供